

# 小学校書写教育における点について

——「う」, 「え」, 「ら」を中心に——

北山 聡 佳

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

**要旨** 高等学校芸術科書道は義務教育の国語科書写を基礎としている。しかし、それらは教科科目が違うためか別々に発展し、今や一貫性のないものとなり、学習者に混乱を与えている。中学校書写では、書写の楷書に少しだけ実画の連綿を取り入れた独特の行書が教えられ、小学校書写では実画の連綿は勿論、太さの変化や墨の潤滑も排除して書くことが望まれる。これらは書道の基礎ではなく、寧ろ書道を否定的に捉える価値観を学習者に植え付けてしまう。

そこで、高等学校書道の基礎を築くために、書写における平仮名学習に注目したい。小学校書写においては、文部科学省による『小学校学習指導要領』で、「正しく、整えて、丁寧に」書くことが目標とされる。しかし、平仮名にはその指標となる「正しい」字形が提示されておらず、様々な字形が存在する。特にはねや止め等の細部は統一が図られていない。そこで、それらの字形を整理し、その後の書写書道の基礎を築けるような教材を作ることが、一貫した書写書道教育構築の第一歩であると考えられる。平仮名字形は、漢字に比べて難易度の高い筆画を多く含み、書道で扱う様々な古典・古筆の基礎を身につけることが可能な字形である。本論文では特に一画目の点に着目し、これまでに書写で登場した様々な形を整理し、書道を目指した理想の形と書き方を提示する。

## はじめに

現在、義務教育の国語科では書写が必修とされ、高等学校（以下、高校）の芸術科では書道を選択して学ぶことができる。しかし、それら二つの教科は内容に大きな違いがあり、さらにそれぞれに問題を抱えている。

例えば、文部科学省の『小学校学習指導要領』によると、小学校書写においては、「正しく、整えて、丁寧に」書くことが目標とされる。そのため、小学校で学ぶべき漢字1006字の標準字形が「学年別漢字配当表」として掲載され、漢字に関しては、字形に細かな決まりがある。しかし、平仮名には字形に関して指標とすべきものはなく、教科書によって字形が少しずつ異なっている。学校ごとに、また教師ごとに「正しい」平仮名字形が異なり、児童を混乱させている。

さらに、中学校書写では、独特の行書が流行し、その後の書道とは似ても似つかぬものを学ぶ。そして芸術科書道を書写の発展と捉えて選択する高校生生はその大きな違いに困惑している。書写書道離れが叫ばれる今、別々に発展し続けるこれらの科目を改めて整理し、一貫した書写書道教育の構築が必要とされるのではないか。

## 1. 本論文の目的

本研究は、高校芸術科書道を目指した小学校書写教育構築に向け、平仮名の字形や書き方の整理、さらには理想の字形と書き方の提示を目的とする。本論文では特に、「点」と呼ばれる筆画に特化し、小学校書写教育における平仮名の点の形や書き方について言及し、1画目となる点の理想の形と書き方を提示する。小学校書写にも、芸術科書道で

扱う古典や古筆の書き方を取り入れ、段階的に習得できるよう、毛筆による書き方から硬筆による字形を考えたい。

先に述べたように、小学校書写の目標は「正しく、丁寧に、整えて」書くことである。しかし、文字に唯一の「正しい」形は存在しない。中国秦時代の始皇帝は、度量衡とともに字体の統一を図った。その字体は、それまで使われた字体を整理し、合理的に統一された形で、瞬く間に中国全土に広まった。しかし、実際は各地で、やはり古来の使い慣れた字形が根強く残り、その絶大な権力でも実用性に勝ることはなかった。その後中国では、実用性や芸術的価値を追求し、様々な書体が誕生した<sup>1)</sup>。これは、文字が人々の生活と深く関連しながら発展するという特性を示している。教育の場という小さな範囲であっても、文字統一は意味をなさない。

これらの文字の特性と歴史を学び得るためにも、小学校で文字の変種を教えることは必要であるが、文字を知らない子どもに多くの字形を提示するのは、混乱を招くだけであり、学習の妨げとなり得る。文字習得に有効であり、かつ、高校書道で目にする古典や古筆を学びやすくするためにも、元々存在しない唯一の「正しい」字形を探るのではなく、場面に応じた実用的な字形を、段階的に提示していくことが望ましい。

## 2. 現行の小学校書写が抱える問題

戦後、教育改革が次々となされる中、小学校書写においては、硬筆の発展が目覚ましく進んだ。それまで主流であった毛筆の字形を鉛筆で表現し、硬筆は日常的に使用する筆記用具の代表となった。しかし、太細の変化や墨の潤滑を十分に表現し得る毛筆字形を、硬筆で表現するには限界があった。さらに、硬筆では横書きにも対応できるよう、正方形の升目に一字を書き表すため、一字で独立した形を目指さねばならなくなった。筆記用具だけでなく、活字の発達にも影響を受け、縦書きでも横書きでも、周囲の文字や配置に関わらず、常に同じ形で書くという応用の効かない字形が増え、それが「整えて書く」ことの理想として捉えられ

るようになった。毛筆から独立し、実用性に応じて変化をしてきた字形が、今度は毛筆字形を変えようとしている。そして硬筆字形は、独立して発展していく中で、必ずしも文字の初学者にとって学びやすいものではなくなった。変遷の過程でできた様々な平仮名字形が、小学校の文字学習において存在している。毛筆を知らない子どもにとって、それらの字形は非常に難しい。

硬筆字形は、硬筆の特性と、学習者の実態を考慮した字形でなければならない。さらに、小学校第3学年より必修の毛筆に向けて、毛筆の特性を段階的に取り入れる工夫も必要となる。

## 3. 小学校書写における点

### 3-1. 点の定義

さて、本論文では特に点について言及するが、日常的に字形を伝えるときにも点という表現を使ってはいるものの、厳密に点とはどの筆画であるかを示すのは難しい。なぜなら、点とは筆を置くだけで書けそうな印象だが、硬筆では特に、すべての筆画でしっかりと筆先を動かして書いているためである。現行の小学校第1学年書写用教科書において、点と明記している筆画は、光村図書出版の『しょしゃ 一ねん』における漢字「六」の1画目、東京書籍の『あたらしいしょしゃ 一』における片仮名の「ソ」と「ン」の1画目、「ツ」と「シ」の1画目と2画目だけで、平仮名の筆画ではない。

そこで、本論文においては、文字における点を次のように定義する。ごく短い筆画で、終筆が払いでないもの、かつ小学生等の初学者が毛筆で半紙に1字程度を書く際に、穂先を動かさずに筆を押し付けて筆圧だけで書いてしまいがちな筆画を点とする。さらに、小学校書写の平仮名における点は、縦画でも横画でもなく、特に必ず傾きのあるものである。

従って、小学校書写において、点を含む平仮名は、「う」、「え」、「ら」（以上、1画目）、「お」、「む」（以上、最終画）、「な」（3画目）、「ふ」（1画目、3画目及び4画目）、「や」（2画目）の8字である（濁点は除く）。この中から、本論文では、1画目

が点であり、かつ2画の平仮名である「う」、  
「え」、「ら」の3字の点について言及する。

3-2. 小学校第1学年書写用教科書における点

では実際に、現行（平成24年度）の教科書会社6社による小学校第1学年書写用教科書の五十音表より、1画目に点を含む平仮名を図1に示し、その特徴を分析する（ここでは「ふ」も取り挙げる）。

現行の平仮名における点には、終筆を止めるものとはねるものの2種に分けられる。同じ平仮名でも教科書会社によって、止めであったりはねであったりし、さらに1つの教科書会社が点の形を統一しているわけでもない。初学者である子どもにとって、これは大きな違いである。

また、筆の運び方にも違いが見られる。教育出版の「ふ」と「ら」の1画目では顕著に表れているが、右に回転するように、少し丸みを帯びて、かぶせるような書き方をしている。反対に、東京

書籍の「え」の1画目は、左に回転し、反るような形に書かれている<sup>2)</sup>。

初学者である子どものための字形は、やはり統一されていることが望ましい。まずよく見て、書くという経験によって文字の形を覚える段階で、いくつもの字形が存在することは、学習の妨げになるからである。さらに、その字形を統一するにあたっては、特殊な技術を要しない、平易な字形であることが望まれる。初めて文字を書く子どもにとっては、はねやはらいといった、速度に変化をつける書き方は大変難しく、短い筆画の中で真直ぐ書く以外の書き方は、大袈裟にしてしまい、升目に収めることができない。

現在の硬筆による字形はどのように確立されたのか。次に現在の硬筆字形成立の背景を、教育制度と筆記用具に注目して振り返る。

出版社	学校図書	東京書籍	教育出版	日本文教出版	光村図書	三省堂
「う」						
「え」						
「ふ」						
「ら」						

図1 現行の教科書における字形（五十音表より）

#### 4. 毛筆の影響を受けた硬筆

そもそも、小学校書写における平仮名字形が、このように数種類あるのは、元々毛筆によるものを硬筆で表したからである。毛筆は、筆圧や筆の傾きが書かれる筆画の太さに直接影響する。同じ筆画を書いても、筆の運び方で全く違う形になる。それを一定の太さの実画だけで表現しようとすると、何種類もできて当然である。

教育制度の改革と硬筆の登場は、教育における字形と深く関連している。

##### 4-1. 書写書道教育の変遷

文字の組織的な教育は、十七世紀以降の武士のための藩校や、江戸時代の寺子屋における毛筆指導に遡る。寺子屋では師匠の書く手書き手本を臨書することで、文字を習得していた。また、往来物も用いられ、教材は無数に存在していた。やがて、明治維新のもと始まった新しい時代には、文部省が設置され、学制により小学校の学科に習字が含まれた。当時はまだ行書が主流であり、低学年では石盤と石筆を用い、高学年では毛筆を用いた習字が一般的に行われたようである。以降様々な教育改革がなされる中、1886(明治19)年に教科書検定制度が設けられ、文部省も習字の教科書を発行した。当時は未だ字形や字体は細かく決められておらず、教科として独立してはいたものの、習字の内容は一定ではなかった。1900(明治33)年、ようやく文部省が平仮名を一字一音に定め、同時に習字は独立教科の位置を失い、1903(明治36)年に国定教科書制度が成立した。国定教科書は教科書における書風や字形の統一に有効だが、手本は執筆者に委ねられた<sup>3)</sup>。さらに、書き方においては学校長により教科書を使用しないことも認められ、学校教育における教科書の地位は未だ確立されていなかったようである。

この国定教科書期において、1910年代には国産洋紙の生産が増大し、学校にもノートを使用する機会が訪れた。それ以降、筆記用具では鉛筆の需要がどんどん高まっていった。やがて国定教科書第6期の1947(昭和22)年度からは小学校で毛

筆指導がなくなり、独立した教科書も発行されなかった。教科書の国定期が終わり、一部文部省によるものが使われる期間が2年間あった後、戦後教育改革として1948(昭和23)年に教科書検定制度が復活し、翌年には検定教科書が使用されるようになった。この制度は現在にまで続いている。この頃には小学校では平仮名先習、硬筆重視で、毛筆は自由研究とされた。

検定教科書使用開始以降の教科書には、書くときの姿勢の解説、新出文字の書き方や筆順、五十音表等が掲載されているものが増え、挿絵も工夫がなされた。また、横書きにも縦書きにも使えるような、正方形の中に納まる平仮名が主流となり、その字形や書風は、執筆者によるものから、筆圧や連綿の変化を排除した平易なものへと変化し続けた。戦後検定教科書における内容の変化は現代の書写教育確立に大きく影響している。

##### 4-2. 毛筆から硬筆へ

###### —— 戦前までの教科書 ——

この激動の中で、教科書における点も大いに変化を遂げている。未だ教科書が確立しておらず、様々な教材書籍を用いていた明治期には、字形も様々であったことは言うまでもない。文部省による一音一字の選定以前も平仮名は慣用的に絞られてきているようだが、制定までは、やはり五十音表にも現在にはない形の仮名、いわゆる変体仮名も多く見られる。

当時の教科書を見ると、まさに筆に任せて書かれており、字形の正しさを厳密に教授することよりも、筆遣いを習得させることに重点が置かれているように見える。点のような短い筆画は、前後の筆画に吸収されているものが多く、独立しているものが現在よりも少ない。筆画の中で、筆圧の変化で点を表現するものもある。連綿が実画となって表れていても、子どもたちは経験によって、その自然な動きを身につけようと何度も練習を重ねたことだろう。毛筆がまだ身近だった時代だからこそできた教育である。

さて、そのような多様な内容の教科書から、国定教科書の使用へと移行するが、それ以前から、文字の整理や統一に関して議論があった。小学校

教育においては1900年に平仮名は一音一字に定められ、1900年8月20日「小学校令」の改正に伴い、翌日に「小学校令施行規則」が公布され、「第一号表」として平仮名が提示された。活字での提示で字種の限定に止まっていたものの、教育における文字が見直され、平仮名が正式に選択されたことは、書写教育の大きな一歩であった。そして、1904(明治37)年には第1期国定教科書である『尋常小学書キ方手本』の使用が開始された。これは片仮名先習で、平仮名はその次に学習する。字間に実画の連綿はなく、一字一字が独立している。書風は顔法の流れを汲み、伸びやかでどっしりとしており、字形は丸みを帯びている。前述の点の定義に当てはめると、それを含む平仮名は現在より多い。例えば、「か」の最終画や、「た」の3画目も点のように書かれている(図2)。第2期本からは、直線的な筆画が増え、書写的な字形の形成が見え始めた。しかし、未だ筆圧の変が多く、実画の連綿も残っている(図3)。

大正時代に入って、国定第3期の教科書が発行された。この頃、社会の変化に伴い、教科書の内容も検討、修正がなされたが、書風や書き方にあまり変化はない。

昭和に入って使用が始まった第4期本では、やはり第2学年より平仮名を学習するが、その書風は柔らかく、連綿も感じられる字形である。一方、漢字は直線的で、連綿やはね、はらいなどを最小限に抑えた現在の書写の字形に似ている(図4)。どの教科書も平仮名との調和が取れていない印象を受けるが、段階的に行書へと近づき、第6学年では古筆を感じられる、流れるような書き方が登場する。

最後の国定教科書は、現在の毛筆字形に少し近づいた。毛筆に慣れない子どもが習得しやすいように以前より配慮された字形である。しかしまだ細い実画の連綿は残る。構成では、用筆や結構を学ぶための文字の順序も考えられているようで、毛筆指導の工夫が見られるようになった(図5)。

また国定教科書で初めて硬筆の教科書が発行された。1941(昭和16)年度より使用開始の第5期本『ことばのおけいこ』である。ここではすでに、多くの実画の連綿が排除され、平易な筆画が意識

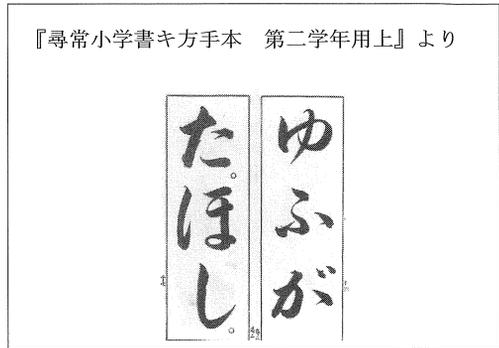


図2



図3

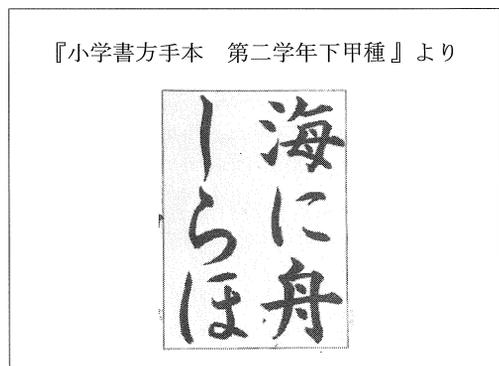


図4

された字形である。現在の硬筆字形にさらに近づいた。また、五十音表は活字で示されている。

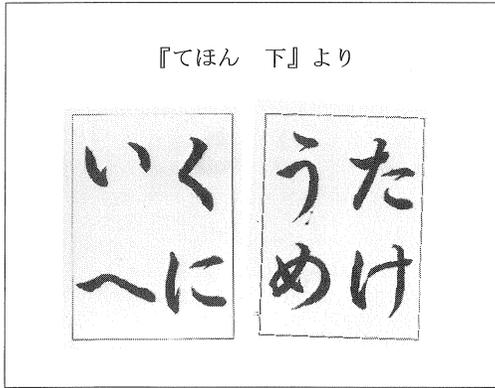


図 5

### 4-3. 硬筆字形の変遷

#### —— 戦後検定教科書期 ——

戦後、墨塗り教科書や暫定教科書の使用を経て、教科書検定が復活した。1948年度用教科書の児童への供給量はおよそ80パーセントだったものの、教科書の種類が増え、供給量も増していった。さらに、1958(昭和33)年には第4学年以上で毛筆が学校の選択によって学習可能となった。そしてようやく、1968(昭和43)年には第3学年以上の毛筆必修化が実現した。各教科書会社によって、硬筆と毛筆の学習時期や配分が異なっていたが、教科書内容の工夫も大いに見られるようになった。その後、教科書の大きさの変更やデザインの工夫がなされ、小学校書写用教科書は、現在の形になっていった。

では、戦後の検定教科書より、硬筆字形がどのように変遷してきたか、具体的に見ていきたい<sup>4)</sup>。

1951(昭和26)年に検定教科書の使用が始まった。当時の小学校第1学年書写用教科書には、五十音表が掲載されていないものもあるが、平易な字形の練習から始めたり、文字学習の前に様々な線の書き方の練習を取り入れたり、現在の教科書の基本的構成は既に確立されている。

この時も教科書の平仮名字形は、実に様々であり、書風は教科書ごとに大きく異なる。執筆者が複数の場合には、一つの教科書中に複数の書風が表れている。「う」と「ら」は、縦書きの影響からか、縦に長い字形が目立つ。点は、反る形もかおせる形もあり、終筆も止めとはねがある。「え」

は、縦長の字形も横長の字形もあり、点の形は「う」や「ら」のそれと変わらない。

昭和40年代以降、各教科書会社で1種類のみ第1学年用教科書を発行するようになり、書風の統一が見られるようになってきた。正方形に納まる字形も増え、高度な技術を要する実画の連綿も省かれるような傾向が見られる。「う」の点の終筆は、1992(平成4)年度版に日本書籍が止めに改定したことにより、以降すべて止めに統一され、今に至る<sup>5)</sup>。極端に縦長の字形はなくなったものの、やはり他の平仮名に比べ、縦長である印象を受ける。

「う」と同じく、現在は終筆が止めとなっている「え」の点も、終筆に変化があった。はねの形は元々少数派であったが、東京書籍は戦後検定教科書において久しく、その終筆をはねとしていた。それまではねのなかった日本書籍によるものも、1961(昭和36)年度版から1968(昭和43)年度版まではねを採用している。その後日本書籍も止めとした1971(昭和46)年度以降、すべての教科書で止めとなり、現在まで続く。

小学校第1学年の書写用教科書において「う」と「え」は、自然と止めに統一されたが、「ら」の点の終筆は現在も止めとはねがある。さらに1960(昭和35)年度版までは一筆で書かれる「ら」もあった(図6)。

1961(昭和36)年度版より、すべての教科書において「ら」は2画となったが、点の終筆の形は統一されていない。字形は縦長のものから、やはりやや幅が広がった。「う」と同様、縦書きに合った、流れるような字形が、横書きにも適したどっしりとした字形となった。

これらの平仮名における点は、平仮名字形とともに変化してきた。因みに1画目が点であった「そ」が教科書においてなくなったのは、1992年

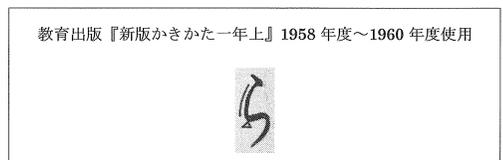


図 6

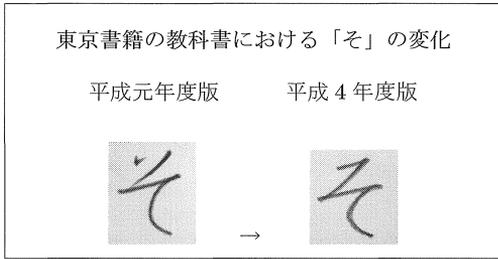


図7

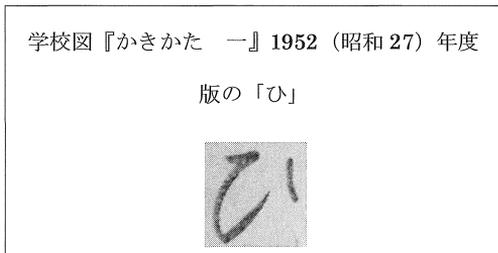


図8

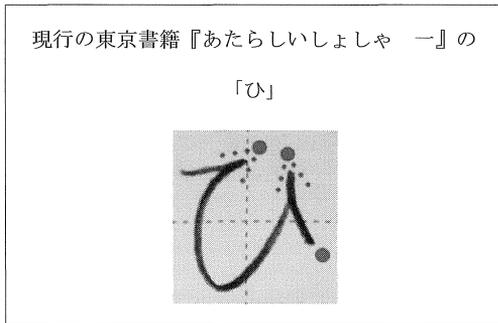


図9

度版からである(図7)。「ひ」も後半の展開を上げ払い上げるものと点の組み合わせという、2画の形があったが、一筆で書かれる形になったのは、1996(平成8)年度版からであり、現在も払い上げるような動きが見られる(図9)。

平成に入ってから尚、平仮名字形は変遷が続いている。字形の変化は、文科省のような一つの機関が制定したものではなく、一種の流行のように感じる。

## 5. 小学校書写における理想の点 —— 書道を目指して ——

点は子どもにとって非常に難しい筆画である。なぜなら、他の筆画に比べて短いのが、その少しの動きの中でだんだん筆圧を加えていき、形を整えて終筆を収めなければならないからである。さらには、次の筆画を見定めてその方向へはねる必要のある点もある。しかしながら、明治初期の教科書には、その難しい動きを含む平仮名が現在のものより明らかに多い。これは、当時は毛筆が主要な筆記用具で、技術の習得が早かったからであろう。その後、その地位を鉛筆が占めるにあたって、鉛筆に向けた字形ができ、今度はそれが毛筆による字形に影響を与えた。それゆえ、現在の小学校教育で扱う毛筆による字形は、毛筆の特性を排除した、変化に乏しい筆画により構成されている。一定の太さで、実画による連綿の排除された単純な字形を好むという価値観が小学校教育にて形成されることにより、毛筆の特性が顕著に表れた古典や古筆を扱う書道の将来が危惧される。

硬筆による字形は、その後の毛筆と関連のあるものでなければならない。さらに、書写の毛筆は、高校の芸術科書道の基礎をなすべきものでなければならない。そこで、高校書道でよく取り上げられる古典作品を参考に、毛筆による点を分析し、それを生かした理想の書写の点を模索したい。

### 5-1. 毛筆による3種類の点

まず、毛筆による点の書き方について考えたい。硬筆にはないが、毛筆の点には、終筆の形以外に、3点の違いがある。それは、書くときの穂先の向き、つまり穂先がどこを通るかである。まずは蔵鋒か露鋒の違いがあり、さらに露鋒には点の輪郭のどちら側を通るかという2通りの書き方(図10)がある。これらはすべて高校書道で学ぶ書き方であるため、書写においても取り入れたい書き方であるが、小学校書写の点にすべて取り入れられるというわけではない。

ごく短い点を書く場合、筆に慣れていない子どもは鋒を斜めに紙の上に置き、筆管を紙に垂直方

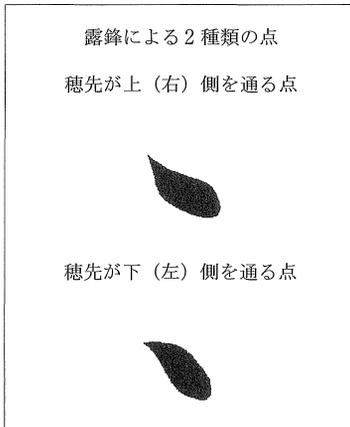


図 10



図 11

向に押し付けることが多い。すると、押さえつけることによって、終筆となる部分は円くなり、いわゆるしづく型になってしまう(図 11)。押さえつける力が強いと、筆の毛が割れて、終筆部がギザギザになったり、筆の毛が広がって終筆部から放射線状に細い実画ができてしまったりすることもある。これは、筆を痛めてしまうだけではなく、次の筆画を書く場合に、筆を整えなければならないので、よい書き方ではない。

その次の段階で、点も一つの筆画であるため、筆を少しだけ動かして書くよう指導すると、起筆の角度のまま、藏鋒になるように筆管を少しだけ引く場合がよくある。これでは少し細長いしづく型の点ができるだけで、結果としては少し毛の長い筆を押し付けたのと変わらない。藏鋒で点を長く書いても、太さが一定で、毛筆の特性が生かされない。小学校書写教育において、藏鋒は点を書く場合には向いていない。

したがって、露鋒の2種類のどちらかを使う書

き方が有効となるが、それは、点の周りの筆画に影響される。ここでは特に、1画目の点を取り挙げているため、その直後の2画目の筆画によって、点の書き方も変えるべきなのである。その例を実際に古典作品から取り挙げる。

## 5-2. 『蘭亭序』における点

### ——「う」と「え」への応用——

高校書道の行書の单元において、『蘭亭序』は必ずと言っていいほど臨書の対象にされる。その『蘭亭序』は、柔らかで流れるように書かれており、一字中の筆画と筆画の繋がりが強い。そこで、この中から、「う」と「え」の点に応用可能な筆画を分析する。特に教科書に載ることの多い「神龍半印本」は、筆の動きが鮮明で、藏鋒か露鋒かの区別もより見やすいため、これを参考にする。

この『蘭亭序』には、様々な点が存在する。それらの点は、他の筆画の形や筆遣いに応じて、見事に使い分けられ、書聖と呼ばれる王羲之の巧みな技術を窺い知ることができる。「う」と「え」は、どちらも、1画目が点で、2画目は点のすぐ下で、点の起筆よりも左から右方向へ横画が伸びる形である。この動きは、『蘭亭序』における「之」や「言」等の文字に見られる。1画目の点の終筆ははねる形も止める形もあり、実画で次の筆画に連綿している形もある。さらに、図 12のように、穂先は点の上(右)側を通るものと、点の下(左)側を通るものがある。

書写における「う」と「え」の点の形が止めに統一されたことは、4-3で述べた通りである。し

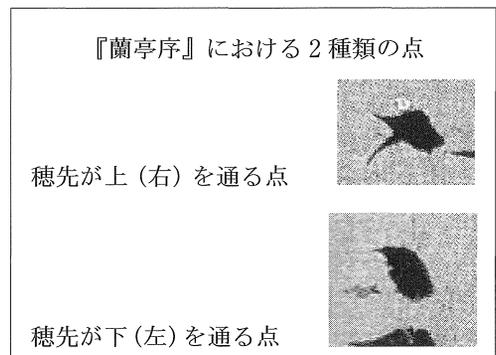


図 12

かし、高校書道で取り上げる古典中の字形には、様々な筆画があり、それまでにその技術を習得しておくのが望ましい。硬筆と毛筆で連携を図りながら、学年に応じて段階的にはねの技術を習得させることが必要であると考え。

『蘭亭序』におけるはねのある点は、穂先の通り道によって2通りに分けられると述べた。そのうち、2画目が「う」や「え」のように点より左側からの横画であった場合は、穂先が点の上(右)側を通るものが多い。それは、次(2画目)の筆画においても穂先が上側を通るため、より自然な筆の動きである。小学生が毛筆で点と横画を書く場合にも、この書き方が明らかに使いやすい。書いている間、筆管を安定させやすく、穂先も整ったまま2画目まで書くことができる。

さらに形をよく見ると、この点の書き方においては、少し反る形になっていることが分かる。直線ではなく、鋒の柔らかさに合わせて動かすことで、筆もまとまりやすく、次の筆画へ連続しやすい。その際に、実画の連綿が現れることもある。

したがって、これらの形を小学生が段階的に習

得できるよう並べると、直線的なものから動きのある書き方へ、さらに毛筆での実画の連綿を意識させたはねのある形になるのが望ましい。

### 5-3. 「う」と「え」における理想の点

児童の学習段階に合わせた、「う」と「え」の理想の点の形は、図13の通りである。まず、硬筆でごく短い直線から学び始める。鉛筆等の筆記用具にもまだ不慣れな子どもにとって、真っ直ぐな筆画を書くということは非常に難しいが、点というごく短い筆画で、真直ぐな筆画を書くという練習ができる。勿論、終筆は止めるのが望ましい。この段階では、まだ形をまねるということに専念しているだけで、筆圧の変化や速度の変化を教えるのは難しいからである。

そして、次に、やや曲線を取り入れた形にする。これは、毛筆において穂先の通る部分を想像しやすいようにするためである。ここで、反る形にすると、毛筆学習の段階で穂先が点の上(右)側を通ることが予想でき、反対に、かぶせる形であると、穂先も反対側を通るということが予想できる

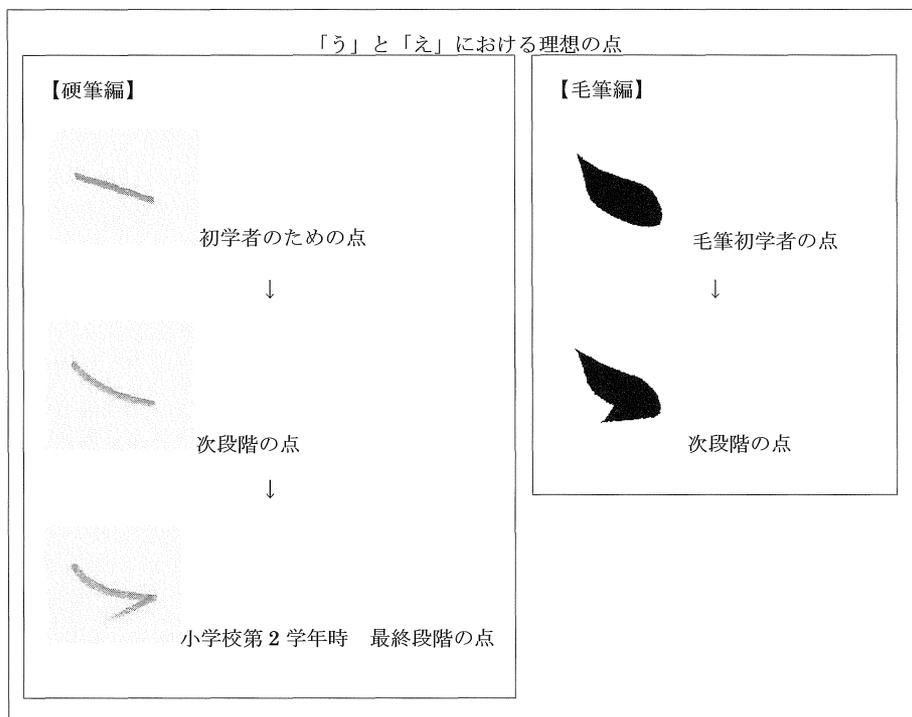


図 13

ようにするためである。

さらに、筆圧や速度の変化を習得した段階で、はねを取り入れた形にする。これはおそらく平仮名の形や筆順を完璧に覚えた段階でもあるため、2画目の起筆の位置を目指してはねることができる。これは、硬筆における点で、最も毛筆に近い形であり、中学校書写における行書にも役立つ筆遣いである。小学校第3学年で毛筆の学習が始まるまでに、硬筆でここまで習得させておくと、毛筆の学習もし易い。

毛筆においては、やはり筆になれることから始めなければならないが、硬筆と同じように点を直線的なものにすると、藏鋒になってしまうため、硬筆で学んだ曲線を取り入れた筆画から学び始めたい。毛筆の場合は、筆画の太さが自然にでき、さらに穂先を点の上(右)側にすると、曲線を意識せずとも、反るような形になる。終筆は止め、筆が整ったままで2画目に運びたい。

そして、毛筆の特徴を習得した上で、中学校書写を目指して、点の終筆にはねを取り入れるようにする。はねがなくとも「う」も「え」も成立しているが、はねを入れることで、その後の行書にも合う平仮名になる。短い筆画の中での、はねへの展開は特に難しいが、書写の行書だけでなく、高校書道の準備として、習得しておきたい。

#### 5-4. 古典・古筆における点

##### ——「ら」への応用——

続いて、「ら」の点について考えたい。先述の「う」と「え」とは異なり、点の次の筆画が、横画ではないという点に注意しなければならない。

「ら」の一画目の点から繋がる2画目は、起筆から真下へ伸びる縦画ではなく、やや傾きのある筆画で、点とは違う方向へ傾いている。さらにその後、「つ」のように右回旋の動きがある。それゆえ、2画目のはじめの動きにおいては、筆画の左側に穂先が通るのが最も自然と考えられる。2画目の動きがこのようになることを考慮して、その前の点の書き方を考えなければならない。

古典において、点と、点のすぐ下に位置する縦方向の筆画という組み合わせは、先述の点と横画の組み合わせに比べて少ない。しかし、行書や草

#### 『蘭亭序』におけるさんずいの形



図 14

書における「さんずい」は、2画目が3画目と結合して一本の縦画から旁の方向(右)へのはねという形になることが多いため、これを参考にしたい。

『蘭亭序』(神龍半印本)におけるさんずいでは、1画目の点は、必ず穂先が上側を通っている。その終筆ははねであり、そのまま実画で2画目に繋がるものもある。そして、2画目では穂先が左側を通り、右へのはねへと展開している(図14)。

さらに、同じ王羲之の系統を継ぐ智永の『真草千字文』を参照する。これは、一字一字独立して書かれているため、筆遣いがより分かりやすい。やはり露鋒で書かれ、特に草書では一字中のそれぞれの筆画の繋がりが強い。この草書のさんずいも、1画目の点と縦方向の筆画から、はねへと展開する2画目という組み合わせで書かれているものが多い。

この『真草千字文』におけるさんずいの点は、穂先が点の上(右)側を通る書き方(反る形)も、反対に下(左)側を通る書き方(かぶせる形)も存在する(図15)。どちらも自然な流れで書かれ、1画目と2画目の連綿が窺える。

さらに、古典だけではなく、日本の古筆にも注目したい。ここではやはり高校書道の教科書に掲載されることも多い、比較的高度な動きの少ない『高野切第一種』から「ら(良)」を取り挙げる。

『高野切第一種』における「ら」は、上の筆画からの実画での連綿、さらに1画目から2画目まですべて一続きで書かれている字形が目立つ。これは筆圧の変化や転折を省き、左右の動きを最小限に抑えた形である(図16)。この字形では、穂先の通る位置も一貫しており、常に筆画の左側を通っている。これは動きを最小限に抑えた書き方



図 15

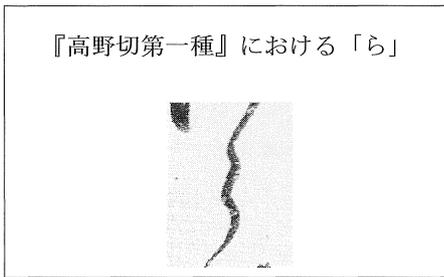


図 16

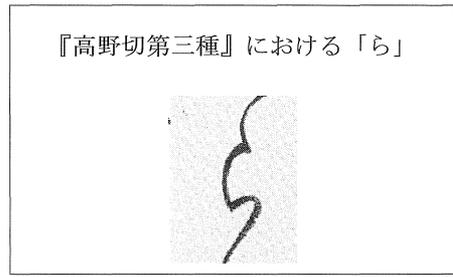


図 17

で、最も簡素な「ら」の形である。

一方、同じく高校書道で取り上げられることの多い『高野切第三種』では、「ら」の1画目を藏鋒で書き、転折の後、2画目へ実画でつなぐ書き方が多い(図17)。さらに『高野切第一種』よりも動きが大きい。しかしこの「ら」では、2画目の転折直後から筆画が太くなり、連綿にあたる部分が最も太くなっている。古筆においては、この書き方であっても、周囲の文字の筆画との組み合わせによって、違和感はなくなる。1画目の終筆は、2画目の起筆の方へ向かわせなければならないので、1画目から2画目への繋がり部分は左側かやや左下へ書かなければならない。鋒の向きを変えずに「ら」を書くと、鋒の向きに沿って書かれる点はやや細く、そこから鋒の向きと垂直方向に書かれる連綿部が太くなり、また鋒の向きに沿って下へと展開していく2画目は細くなる。一文字だけで見る場合、連綿の部分、すなわち現在でははねとなる部分が他の実画よりも太くなるの

は鋒と筆管の向きを変えていないために自然とできるのである。

#### 5-5. 「ら」の変遷とその問題点

毛筆の理想の点を考える前に、硬筆による「ら」の問題点を述べる。

硬筆の発達や横書きの主流化に伴い、硬筆の「ら」も様々に変化しており、今もその形ははっきりと定まっていないことは4-3で述べた通りである。『高野切第一種』および『高野切第三種』における「ら」からも分かるように、「ら」は縦書きにおいて、縦長の字形で書かれることが多かった。さらに、1画目の点と2画目の起筆がごく近いため、古筆では繋げて書かれる方が多い。これらは勿論誤字ではないが、小学生が習得し易いように、一度に提示するのではなく、段階を追って登場させたい。そこで、硬筆による「ら」の技術的な問題点をここで指摘する。

平仮名の初学者による硬筆の「ら」では、はね

の動きが全く意味を持たないものが多い。それは、文字の初学者である子どもは、筆画の形しか捉えられず、はねを書き表すことができないためである。結果として「ら」の点では、転折のある二つの真直ぐな実画の組み合わせになってしまう。速度や筆圧に変化がなく、そればまるで「く」の左右対称の形である。さらに、「ら」は、先述の「う」や「え」と異なり、点の終筆は2画目の起筆と位置が非常に近い。はねというのは、連綿が実画として現れたものであるから、それは1画目と2画目の気持ちの繋がりであって、そのはねの終筆の先に2画目の起筆が位置するのが当然である。しかし、文字の初学者は一画一画の形を見て、一画一画書いているため、次の起筆の配置まで考える余裕がない。1画目のはねを書いたとしても、必ずしもその先に2画目を書き始めるというわけではない。

1960年代に小学校第1学年の書写用教科書から、一筆書きの「ら」がなくなり、1画目と2画目の間が広く取られる傾向になったのはこれらの理由からであろう。小学校第1学年が初めて学ぶ平仮名における点は、やはり高度な技術を排除した、平易なものであり、かつその配置にも注意をしなければならない。

### 5-6. 「ら」における理想の点

古典や古筆における点には、様々な書き方があったが、はねと配置を考慮して、書写に生かせる形を選択したい。

まず、『蘭亭序』における点では、穂先が点の上側を通り、次に鋒が返るような動きで2画目に続いた。この点の形は、先述の「う」と「え」の形と同じである。しかしながら、この「う」と「え」の場合と違って、次の筆画が縦方向で、穂先は左側を通るため、その動きへ繋がりがやすい点の形を追求したい。そこで、『真草千字文』で挙げた点を見ると、穂先が一貫して筆画の左側を通る点と縦方向の筆画の組み合わせがあった。これは、『高野切第一種』に見られる「ら」にも見える筆遣いである。この書き方では、穂先が常に同じ方向を向いており、鋒の向きを気にせず書くことができる。

1画目の点を、穂先が左側を通るようにするには、点の傾きが「う」や「え」の点とは異なり、やや縦方向に近い傾きにしなければならない。2画目が縦方向より右に傾くものに対して、1画目の点は縦方向よりやや左に傾くようにする。この時、鋒の傾きに合わせて傾きの大きい点を書いてしまうと、藏鋒となり、『高野切第三種』にあったように、はねの部分だけ不自然に太くなってしまふ。これを防ぐために、ここではかぶせる形で点を書くことよい。

この毛筆の点を目指して、硬筆の点は徐々に変化させる。「ら」の点では、露鋒の「う」と「え」の点とは異なる書き方を習得させることができるので、書写の段階で2通りの点の書き方を身につけることができる。これは、『真草千字文』のように、一つの古典で複数の点の書き方が出てくるものに応用できる。

書写の漢字でも、教科書には二種類の点が登場するものが多い。一画目が点である4字の平仮名をすべて統一することなく、一画目の点を「う」と「え」、「ら」と「ふ」でそれぞれ統一することで表現の幅を広げたい。書道における行書や草書に近い平仮名で、より多くの技を身につけさせておきたい。尚、「ふ」における点は別稿に譲る。

具体的な「ら」の理想の点は、図18のようになる。硬筆での文字学習開始段階では、やはり「う」と「え」の点と全く同じ形にする。ごく短い、真っ直ぐな筆画である。字形を覚え、鉛筆にも慣れた段階で、やや曲がる形にする。今度は、反る形ではなく、かぶせる形で、かつ、縦方向より傾きを少なくする。ここまでは一貫して終筆ははねないが、毛筆に移るまでに、2画目の起筆を意識させるはねを取り入れるようにする。

さらに小学校第3学年で始まる毛筆における点では、かぶせる形とし、藏鋒にならないようその傾きに注意する。この書き方においては、終筆をはねにするのは少し難しいが、毛筆に慣れて筆圧の変化が習得できた段階で、自然とはねられるよう取り入れる。

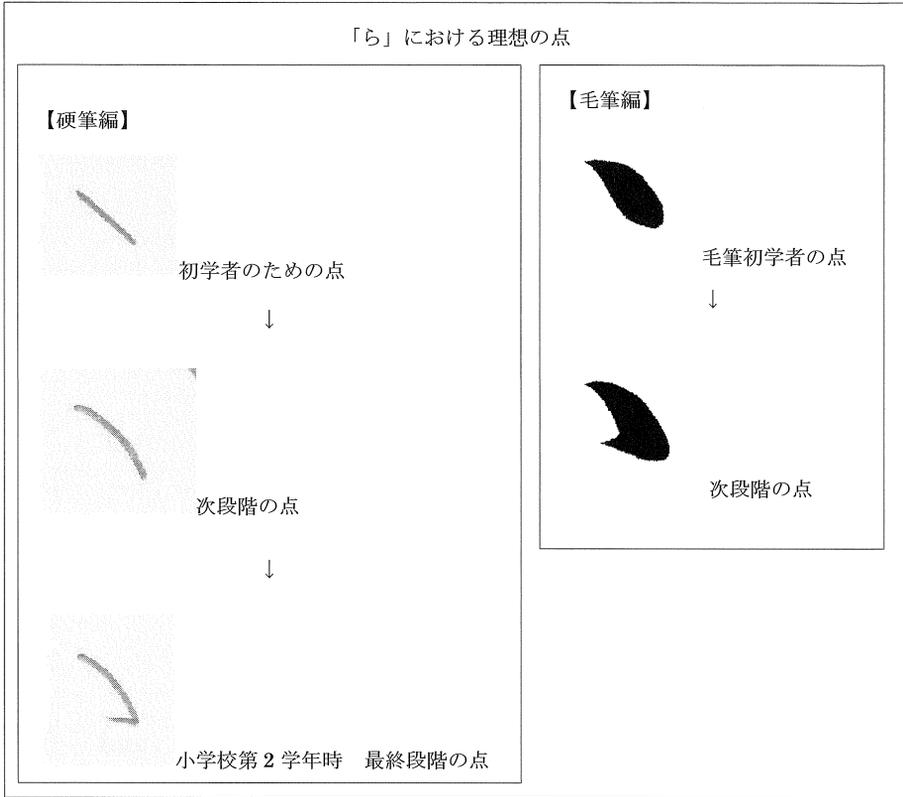


図 18

### おわりに

小学校書写教育における平仮名字形には、多くの形が存在する。歴代の教科書には勿論、同時期に使用される教科書にさえ、実に様々な字形があるが、それらは誤字ではない。この様々な字形を小学生にも習得させ、実用に生かせる字形を自由に選択させることも、文字学習の楽しみとなるのではないだろうか。それは、書道における創作にも似ている。さらに平仮名は、書くときに漢字よりも高度な技術を要する。その技術は、書道で様々な書体の書き方に生かすことができる。

書道という伝統を今後も継承していくため、一貫した書写書道教育の基盤となる文字学習を今後も検討していきたい。書写が、文字学習科目や文化体験科目としてのみ行われるのではなく、書道に親しむ感性を育む科目となることを切に願う。

### 注

- 1) 裘錫圭『文字学概要』（商務印書館、2010年）
- 2) 本論文では、この二種類の点を、「かぶせる形」と「反る形」とする（それぞれ下図の通り、毛筆による）。



- 3) 加藤達成監修『書写・書道教育史資料第二巻教科書史』東京法令出版、昭和59年、17-21頁参照。
- 4) 対象とする平仮名字形は、戦後の小学校第1学年書写用教科書中の、五十音表にあるものである。尚、五十音表がない教科書は下記の通りであり、新出箇所をその教科書の標準とした。  
 1951年度使用 東京書籍 『新しい書き方』  
 1951年度使用 光村図書 『書き方』  
 1952～1953年度使用 光村図書 『書き方』  
 1953～1954年度使用 教育出版 『小学書き方』  
 1955～1960年度使用 学校図書 『小学校書き方』  
 1961～1964年度使用 光村図書 『小学校書

き方]

- 5) 日本書籍による 2000(平成 12)年度版及び 2002(平成 12)年度版では微妙に終筆がはねているようにも見える。

#### 参 考 文 献

文部科学省教育課程課編『高等学校学習指導要領』文部科学省, 平成 21 年  
 文部科学省教育課程課編『中学校学習指導要領』文部科学省, 平成 20 年  
 文部科学省教育課程課編『小学校学習指導要領』文部科学省, 平成 20 年  
 文部科学省教育課程課編『小学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省, 平成 20 年  
 加藤達成監修『書写・書道教育史資料』第二巻教育史, 東京法令出版, 昭和 59 年 6 月  
 佐藤秀夫『ノートや鉛筆が学校を変えた』平凡社, 1988 年 8 月  
 板倉雅宣『教科書体変遷史』朗文堂, 2004 年 1 月  
 渡邊隆男『中国法書選 27 真草千字文 隋 智永』

二玄社, 1988 年 6 月  
 渡邊隆男『日本名筆選 1 高野切第一種 伝紀貫之筆』二玄社, 1993 年 6 月  
 渡邊隆男『日本名筆選 5 高野切第三種 伝紀貫之筆』二玄社, 1993 年 8 月  
 栗原蘆水ほか 12 名著『書道 I』東京書籍, 平成 20 年 2 月  
 渡部清ほか 6 名著『みんなとまなぶ しょうがっこう しょしゃ 一ねん』学校図書, 平成 23 年 2 月  
 加藤祐司ほか 13 名著『しょうがく しょしゃ 1』教育出版, 平成 23 年 1 月  
 中刈正堯ほか 7 名著『しょうがく せいのしょしゃ 一年』三省堂, 2011 年 2 月  
 栗原蘆水ほか 15 名著『あたらしい しょしゃ 一』東京書籍, 平成 23 年 2 月  
 西橋靖雄ほか著『しょうがく しょしゃ 一ねん』日本文教出版, 平成 23 年 2 月  
 宮澤正明ほか 8 名著『しょしゃ 一ねん』光村図書, 平成 23 年 2 月

ほか戦後の小学校第 1 学年書写用検定教科書

## About the Forms of the First Strokes in “う”, “え” and “ら” in Shosha (書写), which is Taught in Elementary School

Satoka KITAYAMA

Graduate School of Human and Environmental Studies,  
 Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

**Summary** *Kokugoka Shosha* (国語科書写) is taught in elementary and junior high school with the intention of building the foundation for *Shodo* (書道), which is taught in high school. However, because *Kokugoka Shosha* and *Shodo* evolved independently they do not compliment each other, but tend to confuse students. In junior high school students learn *Gyosho* (行書) style writing by slightly connecting the lines of *Kaisho* (楷書) style. In elementary school writings that show the least amount of creativity by strictly copying the character are considered good works. This manner of teaching *Kokugoka Shosha* instills a contradictory value with regards to *Shodo* instead of being the basis for a student's learning.

It is for this reason that I would like to look at the forms of hiragana as a basis for *Shodo*. The Ministry of Education defines the goal for elementary students as learning to write in a “correct, well-structured, and careful” manner. There is no one correct set of forms for hiragana and the details vary. My hope is to organize the existing forms and establish a solid foundation on which *Shosha* and *Shodo* can be taught. Because there are more complex characters in hiragana than in kanji, I believe students can acquire a wider range of writing techniques. In this paper I propose the ideal hiragana and writing technique as a basis for *Shodo* by organizing the forms with an emphasis on the first strokes.